
桜

潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜

【Nコード】

N77150

【作者名】

潤

【あらすじ】

兵庫から大阪の学校に転校することになった
男の桜井兄弟は双子である。
大阪についてから
女の桜川姉妹と出会う。
その桜川姉妹も双子であった。
兄の優斗は姉の玲に恋するのであった。

ブロ口。

「またなあゝ」

「おのれらこそ達者でなあゝ」

見送りの友達に手をふっている

「しかし、

兄上、

なんで我らは大阪なんぞへ参るのであるつか？」

「オトンが単身赴任で

さびしいー

っていうからしやあなし俺らが引つ越すんやろ」

「どうしようもない父上じやな」

「どうでもいいけど、お前その口調直せ」

瓜二つの顔が話している。

兵庫から大阪へ引つ越すのだ。

所変わって大阪。

女の子が2人話している。

「でさあ、あのテレビ見た？」

「見た見た」

「ありえなくねえ？」

「ありえへんよなあ」

もう一人の女の子が口を割り込んだ。

「それよりさあ、

今日ウチらのクラスに転校生2人くるねんてなあ」

「気になるなあ。

いままで話してたのは紫やったのはわかるねんけど、
2人揃うとどっちがどっちかわからへんやん」

「あ、ヒド」

「でも、その転校生もなんでこんな田舎にくんねやろ」

「ほんまや。」

「ウチらの学年で20人弱なのに」

「ここにいるのもまた」

「瓜二つの姉妹である。」

「着いたな」

「兄上、

新しい学校はどんなところであろうか？」

「んなことより先にオトンの家さがしや」

「兄上そう呼ばれたほうが地図をみてさがしている。」

「拙者に貸していただけぬか、兄上」

「わかるか、それ？」

「むう。」

「これはどう見るものなのだ？」

「どうでいいけどさあ、」

「ココ本当に大阪か？」

「確かに、人っ子一人みないな」

「でさあ、」

「そろそろウチはダイエットしようと思っんやけどさあ」

「一緒にどう？」

「食べる量減らさないなら、いいけど」

「まったく、あんたは」

「あの、すいません。」

「その美しいお2人さん」

「いままでダイエットの話をしていた2人が振り返った。」

「ナンパしてるのか？」

兄上」

「少々道を教えていただきたいのただ、
よろしいか？」

女の双子は少々ためらいながらも承諾した。
兄上と呼ばれた男は持っていた地図を
2人のうち片方に渡した。

「…ごめん！」

ウチはわからん」

「ちよつと、みして」

「多分、わからんで」

「あ、

この人の名前見たことない？」

「あつ、

あのおっさんや」

「この人とどういう関係なん？」

「よくぞ聞いてくれた。

その方は我らの父上であるお方だ」

「そ…そう。

とりあえず、教えるわ」

（ええんか？

あいつの子やで）

愛想笑いをしてから軽くため息をついて、

「口じゃ言いにくいから、紫がそこまで一緒に行くな」

「ありがとうございます」

「この恩は一生忘れないです」

「うちは、桜川 紫ね。

さつきまでおったのは姉の玲やで。

あんたら今何歳なん？」

「俺が13歳で一応兄やな」

「同じく拙者は13歳で、

この方とは双子の弟ということになっておる」

「えっ、あんたらも双子なん？」

「しかも13歳っておないやん」

「やっぱりそつちも双子か」

「あ、俺は桜井 優斗な。」

「よろしく」

「拙者は桜井 武である。」

「よろしく頼もう」

（できれば弟くんとは関わりたくないなあ）

「あ！

ネコや」

「ちよい、待て」

「弟さんとあなたじゃ性格が全然違うね」

「せやろ？」

「よくあつちでほんまに双子か？」

「って聞かれたわ」

「ニヤ~~~~~」

「兄上に紫殿。」

「拙者、命がけでこのネコを捕まえたのだ」

「<お前が余りにしつこいからしゃあなし捕まっただげてん>

「3人は驚愕した。」

「ああ、拙者感激である。」

「今このネコから声がしたのだ」

「「やっぱ、あれはネコ？」」

「おい。」

「そのネコは危ない。」

「違うネコにしる」

「兄と紫が叫んだ。」

「くなにが危ないだ。」

いつも俺らを危ない目に合わせようとして>

「やはりこのネコの声だ。」

拙者はもう決めた。

このネコを我がペットにするのだ」

<誰が、てめえなんかのペットになるもんか>

「頼むからそれだけは…」

もはや兄の声に力がない。

「このネコの名をどうしよう…」

<マジで飼う気か！

逃げねばならん>

ガウ。

ネコが弟に噛み付いた。

「そゝかそゝか。」

そんなに拙者が気に入ったか」

ん？兄上に紫殿がない。

すでにそのころ2人は目的地に到着していた

「ここやで」

「ありがとつな」

「いえいえ」

「で、どうやった？

あの変態ジジイの子は」

姉の玲が聞いている。

「弟君のほうめっちゃ変けど、おもしろい」

「今日からやなあ学校」

「おおゝ、オマエら今日から学校か」

「父上、

これから学校に行つてまいります」

「おまつ、制服は？」

「これではないのか？」

「そういつてきていたのは
戦国武将の鎧だった。」

「もう、ええわ」

「俺先に行つとくわ」

「っあ、校長室にいかなあかねやった」

「兄上、どうして拙者を置いていったのだ」

「どうでもいいやろ」

「学校の時くらい…」

生徒が過ぎ去る度に2人を見る。

（この人らに聞こ）

「あの、すいません」

「ん。何？」

おそらく年上なのだろう。

そんな雰囲気がある。

「ココの校長室つてどこですか？」

「職員室の真ん中にあるわ」

「ありがとうございます」

「失礼します」

「ああ、キミら。」

新しい転校生かい？」

「はい」

「何年生？」

「むこうでは中2でした」

「ま、この学校でも中2だし、
頑張れよ。」

あつ、ボクは生徒指導の田代だよ」

「あ、あのぼくら校長に用事があるんですけど」

「校長？」

「それもボクだよ」

「えっ、

田代殿は生指の先生では？」

「まあ、

そうなんだけど兼校長もやってるといことかな」

「これ、先生に出すようにいわれたんですけど…」

「ん？ああ。

じゃキミらは2年だから右端から2番目の教室ね」

「えっと、今日から転校生が来ます」

ザワザワ。

ガラガラ。

「えっと、ボクらがその転校生です」

「彼らは親の事情で急にココに引っ越すことになってね
先生が説明しだした。」

「ああ、キミらにぼくの自己紹介がまだだったね。

僕は2年担当の江藤だよ。

生徒のほうから質問ない？」

「その前に転校生の自己紹介は？」

「そうする？」

先生が尋ねる。

「じゃ、お言葉に甘えて」

兄の方から自己紹介を始めた。

「えっと、俺は桜井 優斗です。

兵庫の方から来ました。

えっとこの辺のことはよくわかんないので
案内とかしてほしいですね」

「え、拙者は桜井 武である…」

「一応弟ということでござるな」
ハァ。

相変わらず武の口調は変わらない。

武はこの「自称武士の切れ端」というキャラのせいか、
すぐに同性の友人はできた。

優斗は桜川姉妹と親しくしていたこともあって
異性の友達が多くできた。

学校が終わってすぐにこの町の案内が始まった。

だがこれが恐ろしいことになるとは
誰も思っていなかった。

武ルート

「なあ武、ここはなあお前なら喜んでくれると思うで」

「何があるのでござるか？」

ジャジャーン。

一応この町に伝わる何かやばい奴が祀られているという祠だった。

「なあ開けてみようぜ」

「いいねえ」。

お前のそういうとこ気に入った！

ガチャ。

「……」

「……」

「これは？」

「なんかやばいなあ」

「だって空気おかしいで、今ココの」

「なんじゃ、人の眠り妨げるのは」

「何が起こったん？」

「なんか聞こえへん？」

「あ！」

「いたいた、ネコ」

<ゲッ、この前の奴やん>

「待てニヤ~~~~」

友人の町案内も忘れてネコを捕まえるのに
必死になつてきた武であつた。

「おもしろいやつちやなあ」

優斗ルート

「このケーキ屋、めっちゃ美味しいで」

「どんな風に？」

「クリームが口の中でとろけてなあ、

スポンジがふわふわやねん」

「このケーキ屋」。

「そんなウマいんや」

「せやで！」

「せや、皆で一緒に食べよ」

「マジで!？」

「誰のおごりにする？」

「俺はやめとくわ」

「なんで？」

「おう。優斗」

あたりを見渡す男の影。

「いっぱい彼女ができたんだな」

「違う！」

今日は俺がこの町に早くなじめるように案内してもらってんねん」

「そうかそうか。」

ひふうみい

一気に7股もかけて同時デートかあ。

お前の性欲もすごいのう」

「違うわ！」

なあ？」

「うん」

「その度胸にワシは感激した。

このケーキ屋はおごったろう」

「やって、どうする？」

「ただでココのケーキ食べれんねんで。

行くに決まってるやん」

ガラガラ。

「いらっしやいまで」

「7名様ですね」

「VIPな客だ。

金は受け取るなよ。

ワシのおごりだからな」

~~~~~1時間後~~~~~

「ありがとうございました」

店内でもうめんどいから

地図で説明を受けた。

が、全てココの　はおいしい。

ここの服はおしゃれとかばかりで

結構実用的な町案内だった。

ただし女子にとってはだが…。

「ねえ。

優斗ウチと付き合ってよ」

「早！」

くその通り。

優斗よ。

お前のはんだんは間違えていない。

そやつはケーキは目当てで告白しとる>

「お前誰？」

つかどこやねん?」

<ココじゃココ。>

見えるか?>

「俺も思う。

誰?」

<ハア。>

この手は使いたくなかったんだがねえ。

みさげてごらん>

「下?」

「ネコ!?」

「ネコが話してるよ?」

「なんで?」

<誰がネコじゃ。>

僕は立派なネコじゃ>

「妖怪変化?」

<だからネコだって!>

「あ~~~~~!!

お前あん時のネコ!」

<ニヤ~~。>

貴様は今日も僕を捕まえにきたのか?>

「は?」

「ネコ~~~~」

「おい。

武このネコ話すぞ」

「そんなの知らないニヤ~。

やっと見つけた今日こそ拙者のペットになれ~」

「おい。それはちよつと」

-----  
なんだかんだと気付けば3年になっていた。

「玲、ちよつといい?」

「ゴメン。ウチは紫」

<ハア。>

お主もまだまだ未熟やのう>

「またお前か」

<そうじゃ。>

家の中じゃヒマじゃからのう>

「じゃそのおひまな所へお帰り」

<ハア。>

告白しようと思ったのに

人間違える人に帰れとは言われたくないねえ>

「うっさい」

「え~~~~~~~~!!

優斗って玲が好きやったん？」

「う…うん」

「いつ、どこから？」

「それはちよつと…」

「え、ちよつマジで気になるなあ。」

いわへんねやったら、

うちは言つよ。」

「いや、できればいいたくない」

「本当に言つよ？」

玲とは姉妹やからどこでも言えるんだけどなあ。」

<こりや言つたほうがいいぞ>

「わかりましたよ。」

絶対言わんとしてなあ」

「まかしとき！」

大船に乗ったつもりでいとき！」

「初めてみた時からずっとかわいいなあって

思ってた実はマジで俺のタイプバッチシ的な」

「ようするに人目惚れと？」

「うん」

「まあ大船はいつか沈むのが落ちやけどな！」  
「言わんとなあ」

翌日

「紫、優斗と昨日何の話してたん？」

「え〜とね」

「言うなちゅうたるが」

「もしかして恋バナ？」

<その通り>

「またお前か、ネコ」

「それはどうでもいいけど誰が好きなん？」

「くど、どうでもいいはないんじゃない？」

喋るネコだよ、喋る>

「い、いわん」

「なんで〜、」

紫には言うのにウチにはいわへんの？」

<いえるこっちゃないな>

「はは〜ん。」

ウチがおしゃべりだとか思ってた？」

「そ、そ、そ、そ、そうだよ」

（素直になればいいのになあ、優斗）

「なあ、誰何さあ〜？」

この前からずつとこんな感じである。

「だれでもいいやん？」

<まあ…ほ>

「黙れネコ」

「やあ〜、またこのネコやん」

「なんか、いつもおんねんけどなあ」

「いいやん、かわいいやん」

「玲もね」

！？

言った本人もだが言われた本人もおどろいた。

「いま、なんて？」

「いや、べつに…」

「なあ、紫」

「何？」

「優斗って誰がすきなん？」

「クラスつか学校には10人しかいないし、

まさか本人には言わんし…」

「さあ、誰だろうね？」

沈黙

「昨日な、いつも優斗の近くにいるネコのことを  
うちがかわいいって言ったら、

優斗がなうちのことかわいいって言うてきてん」

「そうなん？」

「よかったやん」

「何があ？」

「仮にもあのエロじじいの息子やで？」

「でも、

今結構なかええやん」

「せやけど…」

「ってか優斗すきなん玲ちやうで」

「なんや」

（一応黙つといたで、優斗）

屋上で優斗が寝ていた。

「優斗〜」



桜川姉妹のどちらかが走ってくる。

「えっと、紫やんなあ？」

「そうやで」

トコトコ

（紫の声？

誰やる？

ってか何してんの？）

「まったく…う…とレ…の見分け方くら覚…なあ」

「ゴメン」

「ほんまに玲が好きなん？」

優斗は

「うん」

（えっ！

優斗ってウチの事が好きやったんや）

「昨日なバレそうになってんけどな」

「けど？」

徐々に優斗の声に怒りが混じりそう。

「ちゃんとごまかしたで」

「よかった。

明日で2学期終わりやん」

「うん」

「だから

明日式終わってから告白しよっかなって思ってたんねん」

終業式はなんなく

終わった。

夕方

「玲〜。

ちよっと今いける？」

優斗がよんでいる。

「ええよ」

（人生初ゝ、告白されんのゝ。  
緊張するわぁ）

カタカタ。

ガタン。

「大丈夫？」

自宅の玄関でこける人はじめて見るねんけど……」  
ちようど時間的にはきれいな夕焼けごろである。  
「どうしょ。

あ！

神社行かん？」

「ええよ」

この長い長い道をキミを自転車の後ろに乗せて  
ボクは神社へ向うよゝ

「何？その歌」

「今、俺が作った」

「うそやゝ」

「ゆずのパックた」

「やっぱりゝ」

じゃあこれは？

ボクがキミを守る

心にそう誓ったんだ

改札をでて

無邪気に手を振るキミ

ボクはキミに好きって

言いたかったんだ

でもいえなかったや

そんな勇気ボクにはなかったよ

もし、

あの時願いが叶うなら

キミに「好き」って言う勇気が欲しいな

「知らんけど、それは？」

「俺が作詞した！」

「すごい、さすが優斗」

「でしょ？」

神社到着。

「あんさあ、玲」

「紫です」

「玲でしょ」

「バレた？」

「えっと、

俺はさあ、

今まで何人かと付きおうたことがあんなけど、  
振り返れば、

たいてい一目惚れか、

友達として仲良くなってから

好きになっていくって感じばっかやってん」

「そうなんや」

（いったい何がいいたいんや？）  
で、

玲らは初めて見た時に

この2人めっちゃかわいいなあって思ってたん」

「でも、なんかその時に紫やなくて

玲のほうに気になりだしてきてん」

「そう」

「で、まあ、え」と

好きになりました。

付き合ってくれる？

「えゝ」

「ちょ待って！」

「何？」

「返事の前に俺が昨日徹夜してまで  
作った詩聞いてくれへん？」

「ええよ」

「川のせせらぎ音

小鳥のさえずり声

どんなものにもキミはかなわないよ

ボクにとってキミは

どんな存在なんだろう？

そんな自問自答を繰り返す

毎日が続くけど

答えは出ないよ

いや、違うや

答えなんかでないんだ

どんな花の香り

どんなポプリの香り

どんなものにもキミはかなわないよ

キミとは一緒にいると

楽しいしうれしいよ

1分1秒でも大切にして、

いとしくなるよ

キミはボクといると

どんな風に思っただろう？

どんなかわいいペット

どんなかわいい画像

どんなものもキミにはかなわないよ

ボクはキミと出逢って

何もかも変わったよ

普段の生活から休みの日まで全部だよ

もう僕の世界の中心は

キミなんだ

キミもボクと同じ風に考えてたらうれしいな

ボクはキミの前では、

はずかしくていえないけど、

「ボクは63億人のなかで

キミが1番好きなんだ」

そう思ってるよ

ねえ、

この言葉をキミに伝えたら

どう反応するのかな？

どんな反応でもいいから、

今だけは

「ボクは63億人の人の中で

キミが一番好きだよ」

63億人に聞こえるくらいの声でいうよ

「うん。」

まあ、

ここまでしてもらって嬉しいねんけど、

優斗は好きやけど、

いや、

いつかな？

うん。

優斗と付き合う「

（後書き）

だいぶ前に書いた小説を見つけて  
なんとなくUPしましたw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7715o/>

---

桜

2010年11月7日17時55分発行